

批評と紹介

エフィ・カネル著

オスマン帝国からギリシア及びトルコにかけての ジェンダーの社会的要求 ：あるギリシア人キリスト教徒女教師の世界

藤波 伸嘉

イスタンブル新市街の中心、タクシム広場からは、今なお「長い19世紀」の正教徒の卓越した社会経済的地位を象徴する聖三位一体教会を仰ぎ見ることができる。その隣に現在もその威容を示すのがザピオン女学校である。本書は、そのザピオンの初代副校長を務めた女教師、ソティリア・クレオメヌス＝アリベルティを狂言回しとして、19世紀後半から戦間期にかけてのオスマン領内外のジェンダーをめぐる諸問題を考察する。著者カネルは近代オスマン社会における都市生活や正教徒の自意識を専攻しており、本書は第一作『コンスタンティノーブルの正教徒共同体における貧困と慈善⁽¹⁾』に続く第二の著作となる。

19世紀の正教徒の世界とは、単にオスマン史にも一国的なギリシア王国史にも還元できない越境的な世界だった。1821年の独立戦争勃発後、1832年にギリシア王国が成立して以降も、オスマン領には数多くの正教徒が居住していた。メガリ・イデアと称される領土拡張策を国是とするギリシア王国は、その標的たるオスマン帝国と政治的には必ずしも良好な関係になかったが、しかし「長い19世紀」を通じた環地中海規模の正教徒商業網の飛躍的拡大を受けてオスマン経済が発展する中、経済力に劣るギリシア王国からは多くの正教徒がオスマン領に渡り、それがオスマン社会の重要な構成要素となっていた。本書の主人公ソティリアの事績は、正にこうした両国間関係を前提とし、またそれを象徴する。

本書の構成は以下の通りである。まず序論でミクロストリア、ジェンダー論、都市化論、教育史学、ナショナリズム論など様々な方法論的な枠組みへの言及がなされた後、第一章「ギリシア国家と都市化：移動の必要」でソティリアの生い立ちが紹介される。続く第二章「スルタンの領域へ：オスマンの現実への関与」で彼女のザピオン時代が論じられると、第三章「恋愛と家族：ロマンスと男性性・女性性の新たなモデル」ではソティリ

アの恋と家族に関する思想をめぐる考察が行なわれる。第四章「フェミニズム潮流と都市の女性の可変的表出」はソティリアを中心に19世紀末オスマン内外の女性運動の諸相を描き、第五章「オスマン末期から戦間期に至るバルカンの社会的紐帯、女性結社の介入、女性運動」で当該期のオスマン内外の女性運動と民族主義との相互関係及びその推移が民族横断的な視座から考察され、最後に結語によって本書は締め括られる。

以下、まずはソティリアの一代記的に本書の内容を紹介し、その上で本書全体に対する評価を記したい。

1847年に独立戦争の闘士の娘としてアテネで生まれた彼女は、市長や議員を歴任した父を幼時に亡くす。22歳で未亡人となった母アンナは娘を養うべく再婚した。義父自身は無学だったが子供の教育には理解があり、そのお蔭もあってソティリアはアテネの女子教育の開拓者であるヒル夫妻の女学校に通う。卒業後の1869年から、傾き始めていた実家の財政を助けるべく、彼女は同校の教師として就職した。そこでソティリアが仕えた校長が、やはり同校の卒業生であり、一生を通じた盟友となるカリオビ・ケハヤだった。ソティリアはヒルの女学校での教職自体は三年で辞め、リヴォルノで家庭教師として働くが、ケハヤとの親交はソティリアに転機をもたらす。1875年、設立予定のザピオン女学校に招聘されたケハヤは、これを受けるに際し、ソティリアにも帝都イスタンブルへの同行を勧めた。

1875年9月、ザピオン開校の日よりケハヤは校長に就任し、ソティリアは副校長に任命される。時あたかも「ブルガリア問題」の最中、正教徒の間ではブルガリア教会独立の動きに対応して教育振興への意識が高まり、そのために各種の自発的結社が設立されていた。ザピオン女学校もまた、正にその文脈で、帝都の正教徒の中核として機能していた「在コンスタンティノーブル・ギリシア文芸協会」の傘下組織、「女子教育協会」の活動の成果として開設されたのだが、その費用を賄ったのが、イピロスの資産家コンスタンディノス・ザパスだった。これは、帝都の正教徒政界の権力構造に変動をもたらさないよう、敢えて「田舎」の人間の資金を導入するという選択の結果だったが、ザパスの側にも、それを通じて、帝都の選良の仲間入りを果たすことができるという利点が存在した。

その規約に明記される通り、ザピオンの目的は、「東方の民族の娘たちの学業、倫理的形成、そして彼女らへの初等及び中等教育による学問の浸透によって、家庭や社会におけるその真の使命を全うせしめること」である。これは、オスマン公教育と同様に、近代化の文脈での教育振興の潮流に棹差すものであり、そこに示されるのは人類の進歩や民族の向上のため

の良妻賢母教育の論理である。そしてその方法論として西洋学知を体現しているところにザピオンの威信は存していた。ザピオンの名声は、正教徒のみならずムスリムやアルメニア人にも伝わっており、同校の行事は、総主教以下の正教徒指導層だけではなく、公教育相やガラタサライ校長など、帝国の名士が列席する一大事業と化していた。

そのようなザピオンの校長たるケハヤは職務上、同校理事会や女子教育協会、更には文芸協会を介して正教徒の指導層と直結することとなり、民族の向上という課題を共有する現場の責任者として大きな権力を握った。だがザピオンの規約自体の作成にケハヤは与っておらず、彼女はあくまでそれを起草した理事会の意向を執行する立場に置かれていたに過ぎない。そして理事会はシノド評議員たる府主教や俗人評議員といった既存秩序を代表する男性によって構成されていたから、「目立つ」女性の常として男性陣からの誹謗中傷を一身に浴びていたケハヤが置かれていた立場は、決して中立的なものではなかった。とはいえ他方で、豊富な留学経験を持ち、欧米知識人からその業績が認知される国際人だったケハヤに対しては、男性陣もまた一定の配慮を払わざるを得ない。実際、ケハヤは数少ない女性の文芸協会員の一人である。ケハヤはこうした非制度的な権威を背景に、規約に反して理事会の専権事項である筈の人事案件にも立ち入り、更には創立者ザパスとの直接の紐帯を確保して、それを担保に正教徒共同体内部での影響力を高めていた。だが、そのこと自体が彼女にまつわる更なる毀誉褒貶の種となる一方、ケハヤの権力増大は新たな家父長主義的な権威構造をもたらしもした。ザピオン内部では創立者ザパスを父、校長ケハヤを母とする疑似家族の言説が内面化されていく。こうした権威主義は時の君主、アブデュルハミト二世の体制の家父長主義とも結び付き、正教徒の間で強固に再生産されていった。

この間、ソティリアはザピオン在職中に書店員イオアンニス・アリベルティスと出会い恋に落ちる。彼は1876年以来、文芸協会の書記としてザピオンの理事会に接触する機会が増え、故にソティリアと職務上の立場や情報を共有していた。二人が頻繁に交わした恋文の中で析出されるのは、都市化が進む社会に対して独立し自律した個人という像であり、対等な個の内面上の結び付きとして二人の恋愛は位置付けられる。そして、二人はそれを、あくまで各々の理想と感情の交流の結果として、肉体関係以上に精神的な友愛関係に依拠するものとして描き出した。こうしたロマン主義的な恋愛像は正教徒の間ではそれなりに広い範囲に共有されていたが、彼女らは他面でこの恋愛を知識人の特権的な関係として表象していたのであり、そこには一般大衆と自分たちとを隔絶させる機制が潜んでいた。

二人は1882年夏に結婚し、それに伴ってザピオンを退職したソティリアは、夫の任地であるブカレスト近郊のプロステニに向かう。そしてイオアンニスも1886年にそれまで関与していたザピオンから離れ、一家は同じくルーマニアのジュルジュに移住して、オデッサからの食料品輸入の商売を始めた。そしてこの時からソティリアは活発に女性運動に携わる。特にアテネ刊行の『女性新聞』に彼女は精力的に寄稿した。ソティリアらにとり、ザピオンとは単なる生計の途ではなかった。同校の女教師たることは、環地中海全域の正教徒の間で通用する社会的威信を約束していたのであり、故にそこからの離脱はソティリアに大きな喪失感をもたらした。だからこそ彼女は、それを埋めるべく女性運動に積極的に参加する。『女性新聞』関係者にはソティリア同様の中間層に属する職業婦人が多かったが、彼女らが従事したギリシア王国外での教育活動は、それがギリシア文化を広める民族的な活動と表象されたが故に、王国の貴顕との関係構築を可能とし、それが翻って彼女ら職業婦人にとっての社会的地位向上の戦術として機能した。ソティリア夫妻はルーマニア及びギリシアの名士との親交を誇示し、そのことによって、ザピオンという権威から既に離れ、経済的にも傾きつつあった一家の体面の維持を図る。それが、都市化の進むオスマン内外の正教徒社会での商業・文筆活動において必須であることを、二人は熟知していた。

この夫婦の間では結婚後、基本的にソティリアは家庭内の母の務めを重視し、イオアンニスが家計を担うという役割分担がなされたが、それでもなおこの二人は対等の立場で家政を共同で運営し、その将来を計画する。その二人の協議の結果、1893年にソティリアは、生活費を削減すると同時に夫の商業上の代理人として働くべく、二人の息子と共に母アンナの住むアテネに戻った。だがイオアンニスの商売は上手くいかず、同年12月には破産に追い込まれる。再起を図るべく、彼はかつてイスタンブルで親交のあった府主教バシレウスの庇護の下、イズミルで新たな事業を始めるが、これにも失敗し、その後いくつか手を出した商売にも悉く失敗して、健康を損ねた彼は1902年5月に世を去った。母と同様に夫に先立たれたソティリアは、家計を支えるべくポントスに赴き、同地の女学校の校長に就任する。求職に際して力を発揮したのは、ザピオン以来の女教師間の人的紐帯だった。

やがて改めてアテネに戻ったソティリアは1911年11月、全ギリシア女性協会総書記に就任し、王国の政治家との接触を密にした。そして、アテネの王党派とサロニカのヴェニゼロス派とが第一次世界大戦参戦の是非をめぐって内戦状態に陥った「国民分裂」の最中の1917年、彼女はサロニカの

ヴェニゼロス政権の下に移り、そこで同政権の庇護下に自ら設立したサロニカ女性協会の長に納まって、政治権力との密接な関係の下、女性問題に関して広汎な行動の自由を得た。その後、彼女は1922年の小アジア「破局」の際も慈善事業や救護活動に尽力したが、加齢と共に第一線からは退き、やがて1929年11月に死去した。アテネを振り出しにリヴォルノ、イスタンブル、ブカレスト、再びアテネ、ポントス、そしてサロニカと、環地中海の正教徒社会を股にかけて活動したソティリアの事績は、19世紀後半から戦間期にかけての働くギリシア人女性の一つの典型であったと言えよう。

さて、ソティリアを中心に以上に見てきた正教徒の女性運動は、その周囲の非正教徒の女性運動と密接な相互影響の関係にあった。ザピオンは少なからぬアルメニア人やムスリム、ユダヤ人の女学生を受け入れており、これら学業を共にした女性の間には卒業後も一定の紐帯が保持される。ところがこうした現実の接触にも拘らず、『女性新聞』などギリシア語の女性誌には非正教徒に関する情報が極めて少ない。これは、この時期のギリシア人に特有の、「野蛮な東方」に対する優越意識やメガリ・イデア的な排外主義の表れと解釈できる。その意味でも、正教徒の女性運動はしばしばギリシア民族主義を補完する役割を果たした。だが他面で彼女らの職務は、王国の領土拡大というよりは、ギリシア話者への文化的浸透の使命として意識されるものであった。彼女らの活動は王国の領土拡張を前提とも目標ともしておらず、国境に囚われない環地中海全域の正教徒社会がその舞台となる。ソティリアやイオアンニスの例にも見られる通り、ギリシア王国は決して活動の中心ではなく、経歴の出発点にして、事業に失敗した際の避難所、再起を図るための場に過ぎない。この観点から見ると、オスマンという帝國的編制の中で汎イスラームの論理で思考したムスリム知識人と彼女らとの間の差は実は、それほど大きくない。

そして「長い19世紀」の後半、帝国主義の時代におけるオスマン内外の女性運動は、民族や宗派の別を問わず、資本主義化と都市化という同一の環境の下に置かれていた。故にこれらの女性運動は概ね共通して、近代化の潮流に棹差しつつ、自らが属する国家や宗教、民族や郷土の進歩向上に資するべき、自立し自覚した個人による運動として表象される。だが正にそれ故に、各民族の女性運動は、それが属する集団の民族主義の性格によって、類似の中にも一定の相違を示していた。例えば、その民族主義が帝国の現状の枠組みを打破する方向に進みがちであったオスマン治下のブルガリア人やアルメニア人の場合、女性運動も早く1850年代から本格化し、民族運動の発展と共に、その内容も急進化していった。これに対し、現存す

る帝国の枠組みの保持に利益を見出すギリシア人やユダヤ人、そしてムスリムの場合、女性運動の登場自体が比較的后発となり、その内容も、既存の道徳や権威を承認する良妻賢母型の論理に強く規定された、現状維持的かつ保守的な方向に向かう。

こうした中、専制から立憲政へとオスマン国制自体の変革をもたらした1908年の青年トルコ革命は、女性運動と政治との関係にも変容をもたらした。アブデュルハミトの治世において、ムスリムやアルメニア人は疎外されていたのに対し、正教徒は権力の側にあったことの帰結として、1908年以降、権力構造の転換した立憲政の時代において、トルコ人とギリシア人各々の女性運動は、前者の発展と後者の停滞という対照を示すことになる。

革命後、ムスリム女性の間では出版、慈善、教育活動が顕著に増大し、その内容も急進化する。そして、ムスリム知識人全般の例に洩れず、彼女らもまた多民族多宗教的な公民的オスマン国民の理念の下にあったため、革命後のムスリム女性誌はしばしば非ムスリム、特にアルメニア人女性の同種の運動に肯定的に言及する。現実に民族や宗派の枠を超えたオスマン女性全体のための結社も数多く作られていた。

ところがバルカン戦争と第一次大戦、そしてトルコ独立戦争の渦中で、ムスリム女性の政治化は、同時期に急成長を遂げたトルコ民族主義の論理とも共振し、徐々にオスマンのそれからトルコのそれに変質していった。それはムスリム企業家育成や国産品消費を目指した「国民経済」とも連動し、その文脈で女性の生産や消費の意義が強調され、民族の論理と都市化の論理、そして女性運動の論理が同調する。ハリデ・エディブの例に典型的なように、民族独立の運動と結び付いたトルコの女性運動家は、戦間期にかけ、ケマリズムの一党支配の下で、社会進出や政治参加という点において、顕著な成果を挙げたのだった。

他方、正教徒の女性運動はオスマン帝国でもギリシア王国でもかつての威信や独自性を喪失し、1910年のヴェニゼロス首相就任後、彼の指導下で領土拡張に邁進する王国のメガリ・イデアの論理に呑み込まれていく。前代の専制の下で権勢を誇ったオスマン側の正教徒の既存の権力構造が革命後に解体に向かう一方、政権交代を経たギリシア側ではメガリ・イデアが再活性化し、両者の力関係も後者の優勢へと再編される。その後の戦争の連鎖を経てかつての環地中海全域の正教徒の社会経済活動の舞台が分断される中、正教徒の女性運動は沈滞し、続く戦間期のメタクサス独裁下、更なる受難の時を迎えることになる。

このように本書は、ソティリアという傑出した女性を狂言回しとして、

19世紀後半から戦間期にかけてのオスマン領内外の女性をめぐる教育、出版、思想、政治の諸相を活写し、しかもそれを一貫して多民族多宗教的な視座から描いたことで、「帝国の時代」オスマン内外のジェンダー状況を照射した優れた研究となっている。近年のギリシア史研究ではかつての単線的な民族解放史観の見直しが盛んとなり、その結果、近代オスマンの正教徒臣民、特にその社会経済活動をめぐる研究の進捗が著しい。本書は、こうした潮流に棹差しつつ、ジェンダーや慈善をめぐるオスマン史研究の成果をも吸収し、新たな知見を提示している。

勿論、その達成の陰で弱点と思われるところもない訳ではない。例えば、本書は女性運動に対する個々の民族主義の規定性をやや過大評価しているかに見える。また本書は、ソティリアが母アンナ、夫イオアニス、盟友ケハヤとの間で交わした書簡を主な史料としているため、この三人が死んだ後の20世紀初頭に関する議論は、ソティリア本人はなお存命中であり、寧ろその社会的活動の頂点にあったにも拘らず、それまでの密度に比べて、やや粗くなっている印象が否めない。更に、ギリシア人の女性運動についての議論に比し、トルコ人のそれについての議論は、全般にやや二次文献への依存が強いように見受けられる。そして本書における理論面からの分析にそれほどの新味がある訳ではない。

だがこうした点は何ら本書の意義を損なうものではない。元来、本書の貢献は、理論面での新機軸の提唱というよりは、既存の理論を意識しながらも、どれほど当該期のオスマン内外の人々の生／性に迫れているかという実践の側面でこそ計られるべきものだと思われる。そして本書はそれに十分に成功している。確かにそれは主人公ソティリアやその周辺の人々の魅力に起因するところが大である。だがそれもまた、その魅力を引き出し首尾一貫した叙述に仕立て上げた著者の技量あってこそそのものだろう。

特定の民族や宗派に限定された視座のみに基づくジェンダー論は、しばしば当該の民族や宗派についての本質主義に陥り易い。だが近代化や都市化、資本主義化が進む「長い19世紀」のジェンダー規範やその変容は、彼女らが属した政治社会の構造や、更にはその政治社会自体が属した当時の国際秩序の構造を踏まえて論じられる必要がある。従って、多民族多宗教的なオスマン社会に関する限り、ジェンダーもまた民族横断的に論じられる必要があろう。その点、正教徒女性を主軸に据えながらも、ギリシア語とトルコ語の史料を併用して、オスマン内外のジェンダーと政治を一貫した問題関心から民族・宗派横断的に論じた本書の達成は高く評価されるべきと思われる。本書の紹介を行なった所以である。

註

批 (1) Έφη Κάννερ, *Φτώχεια και φιλανθρωπία στην ορθόδοξη κοινότητα*
評 της Κωνσταντινούπολης (1753-1912), Αθήνα: Κατάρτι, 2004.

と Έφη Κάννερ, *Έμφυλες κοινωνικές διεκδικήσεις από την Οθωμανική*
紹 *Αυτοκρατορία στην Ελλάδα και Τουρκία: Ο κόσμος μιας ελληνίδας χριστι-*
介 *νής δασκάλας*, Αθήνα: Παπαζήσης, 2012, 390p.

(東京大学・特任助教)

藤
波